

師 事 し て 46 年*

——萩原先生の朝日賞受賞に寄せて——

藤 田 良 雄**

昭和 20 年 5 月の空襲で焼失するまでは東大の天文学教室は港区の旧町名麻布狸穴(まみあな)町にあった(もっとも本郷キャンパスの理学部 3 号館に昭和 35 年正式に移転するまでは焼失後同処にバラックが建てられ教室として使用されていた)。これは明治時代から続いて使用されていた由緒?ある建物だったのである。理学部の天文学科に入学すると最初の 1 年(前期と云っていた)は本郷キャンパスで物理や数学の講義及び演習を受け、2 年(中期)になると午前中は矢張本郷で物理や数学をきくが、午後は専門科目として天文学の講義や演習を受けるために麻布へ来るようになっていたのである。

昭和 4 年秋のある日の午後、私は中期学生の一人として麻布の教室にやって来た。そこで私は端正な若い学究として私の眼に映じた萩原先生に始めてお会いしたのである。その日から現在に至るまで 46 年の縁が続くのである。先生は丁度アメリカのハーバードでの研鑽を終えて帰朝されたばかりであった。フレッシュな天体物理学の講義と、その頃出版されて間のない Eddington の“星の内部構造”を輪読するゼミ、これらは先生の専門の天体力学の講義の外、私たちが傾聴した多彩な授業内容であった。卒業してから 6 年間、私は三鷹の東京天文台に勤務したが、週 1 回麻布の教室へ来るのが大きい喜びであった。それは先生の聲咳に接することによって、絶えず学問への執着が続けられるという安心感であった。

昭和 12 年に天文台から教室へ移った頃、先生は御専門以外の天体物理学のいろいろな問題に研究の意欲を燃やされていた。北海道の日食で観測されたコロナの測光の周到な処理もその一つではあるが、特に心を向けられたのは惑星状星雲の物理機構であった。続々と論文を発表されたが、卒業したばかりの故畑中さんを始めとして若い数名の人が計算のお手伝いをした。理化学研究所の高嶺研究室に畑中さんと共に先生のお伴をして、物理の人たちとの合同談話会を始めたのもその頃であった。高嶺先生はラボラトリー分光学の大家であったが、天体物理学にも大へん興味を持たれていた方であった。

昭和 20 年終戦の年東京天文台が全焼した後、先生は東京天文台長を引き受けられた。学究的な先生が、このような、時には学問を離れた世界にタッチするのを余儀

なくされるような仕事に携わるということは、余程の決断を要したことだろうと推察されるのである。恐らく先生は暫らくは自分の研究を中絶しても、荒れはてた天文台の現状を復興させるためにつくしたいと云う一念に駆られて決心されたのであろう。いずれにしても大へんな仕事であった。発足したばかりの日本学術会議の天文学分野の会員として選挙されたばかりでなく、天文学研究連絡委員会、日食研究連絡委員会の委員長に推挙された。その外物理学地球物理学その他の広い分野にまたがる電離層研究特別委員会でも最適任者として委員長に推挙された。天文学研連と日食研連は先生が委員長をやめられるまで私は幹事として下働きをさせていただいたが、今改めて、いろいろのことに苦勞された当時のことを思い出すのである。その中でも 74 吋反射望遠鏡の建設を学術会議で決議するまでの御苦勞、そしてその後で建設を具体化するまでの御努力、日食観測のための観測隊の編成そして観測隊を外地に運ぶための観測船についての交渉等一つ一つの出来ごとが新たな追憶をもって思い出されるのである。先生がある計画を企画されて、それを実現に移す努力をされている時、“どうも思わしくない”、“うまく行かない”、“多分駄目かも知れない”と漏らされる時、実はもっとも望みを持って実現を期待して居られるのだということを私は知ったのである。74 吋望遠鏡の建設がきまった時、先生は青山にある平山信先生の墓前に行かれ、報告された。その時私は先生のお伴をしていったのであるが先生の人としての暖かさを強く感じたのであった。

停年で東京天文台長をやめられるまで、たしかに先生には絶え難い研究の中断があった。しかしその貴重な犠牲によって日本の天文学が現在世界の第一線に顔を出している基礎が確立されたのだと思う。東大を退かれてから更に東北大学、宇都宮大学学長というお仕事はあったが、再び学究生活に戻られた。御専門の天体力学の研究に楽しんで居られるのを見るのは私たちの喜びであった。そしてそれが今や天体力学の集大成という厩大なライフ・ワークの完成に近づいているのである。このような仕事を表彰するにふさわしい世界的な賞がないものであろうか?

今日まで 46 年余り、先生によって自分のささやかではあるが研究のともしびが常に燃えているのを感じずには居られない。御健康を心から祈る次第である。

* 1月16日、朝日賞受賞式の後の記念パーティーで行なったスピーチに若干補足を加えた。

** 東京大学名誉教授、東海大学